

愛着障害児における 感情処理関連領域の白質線維変容を解明

福井大学子どものこころの発達研究センターの友田明美教授らの研究グループは、反応性愛着障害 (RAD) の児童は定型発達児よりも脳梁体部や投射・視床経路の白質の異方性比率 (FA) が増加し、更に放射拡散計数 (RD) が減少している (図 1、図 2 の赤丸の部分) ことを明らかにしました。これは脳梁体部や投射・視床経路の白質線維の結合性が RAD の児童で高まっていることを示唆しています。脳梁体部、投射・視床経路は感情の調整・抑制に関わっていると考えられていることから、幼少期に受けたマルトリートメント経験により、RAD ではこれらの領域が非定型に発達したと考えられます。本研究は、診断や評価に資する客観的なバイオマーカーが未確立である RAD の脳内メカニズムの理解や治療・支援法の開発に貢献すると考えられます。本研究の成果は、2020 年 6 月に科学雑誌 *Psychiatry Research: Neuroimaging* に掲載されました。

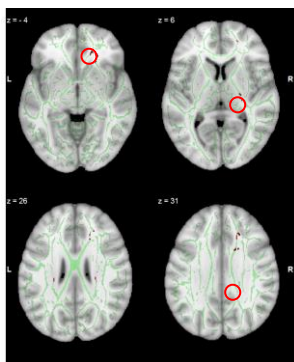


図 1. RAD で FA が増加していた領域

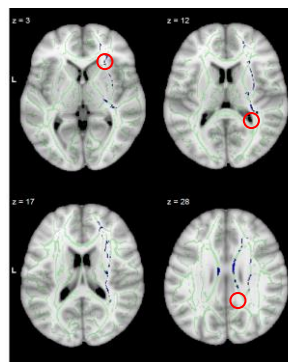


図 2. RAD で RD が減少していた領域

Makita K, Takiguchi S, Naruse H, Shimada K, Morioka S, Fujisawa TX, Shimoji K, Tomoda A. White matter changes in children and adolescents with reactive attachment disorder: A diffusion tensor imaging study. *Psychiatry Res Neuroimaging* **303**, 111129 (2020). doi: 10.1016/j.psychresns.2020.111129

<研究支援>

本研究は下記の日本学術振興会科学研究費補助金等の支援により実施した成果です。

基盤研究(A)、基盤研究(B)、挑戦的研究(萌芽)、JST/RISTEX、AMED-BIRTHDAY、日米科学技術協力事業「脳研究」分野 グループ共同研究助成、武田科学振興財団特定研究助成：いずれも友田明美

若手研究(B)、若手研究、臨床薬理研究振興財団 研究奨励：滝口慎一郎